

山桜の里 戸赤

原発事故の終わりを願いつつ
人のつながりで地域を楽しむ



小さな池にふれあいの笑い声がこぼれた

魚つかみ・

大せんこう花火大会

花豆

栽培講習会



少しずつ熟したもから収穫して乾燥させる花豆

花豆が放射性物質に汚染されていないかどうか、今年

の花豆が売れるかどうか検査することになり、農林事務所農業振興普及部において戸赤の花豆は県の検査機関に持ち込まれました。結果は判明次第公表されます。



心配した雨も花火の時間は待っていてくれた

【木地の学習No.10】近世を通じて山論はいたる所の村で発生しており、原因としては主として入会地や境界問題であった。論所になるところはもともと居村から離れた奥山が多く、毎日のように利用しているところではない場合が多い。そのような山奥を稼ぎ場としていた木地師たちが、山論に直接間接に関わり文書に登場してくる例もある。次にいくつかあげてみよう。昭和村広平の山論は、入会地が論争になったものである。広平は舟鼻山の北側山麓に広がる大芦、両原、喰丸の3カ村入会の広大な地で近世3度の論争を引きおこしている。1回目は元禄16(1703)年のことで、当時広平へ木地師が入っていたが論争の原因は不明。次は寛政4(1792)年、琵琶首村木地挽より入山願いがあり、大芦村は舟鼻峠の西方沼ノ沢へ許可したが、喰丸、両原両村の訴えで論争になり入会の確認をしている。3回目は、…金石川へ喰丸、両原両村へ断りなく木地師を入れたことから論争になっている。これに対して大芦村では、…金石川は御国産のため、藩より差し置かれた木地師たちで広平とは違って由緒ある所であり、なぜ喰丸、両原へ相談しなければならぬのかと反論している。この論争も内扱いになり、結果は「入会は元禄図面のとおりに近辺の大山能山にある巢鷹場保護のため伐採は禁止する」となった。(奥会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)

